

野菜・茶業試験場久留米支場で育成されたイチゴの新品種‘さちのか’の、本県への適応性について調査した。

1. ポット育苗による促成栽培では、‘とよのか’に比べ収穫時期が1週間以上遅れ、早期の収量も少なかった。総収量は同程度であったが、収穫時期の前進化が必要であると考えられた。
2. 低温短日処理（夜冷）育苗による促成栽培では、12月初頭からの収穫が可能で、収量も‘とよのか’より多く、適応性が高いと考えられた。
3. 夜冷育苗による促成栽培では、‘とよのか’と同様に6月中旬ごろに採苗し、育苗日数を長くした方が収量が多かった。
4. 小型の果実の発生を防ぐため、摘果を行うと、総収量は減少するが、大型の果実の収量が増加し、高い効果が認められた。しかし、摘芽の効果は低く、必要性は少ないと考えられた。
5. ピートバッグ栽培では‘女峰’、‘とよのか’より高い収量性を示し、果実の品質も優れ、適応性が高いと考えられた。
6. 小型成型苗の利用において、挿し芽による採苗では鉢受けに比べ収量が低く、‘女峰’と同様の方法では適応性が低いと考えられた。

キーワード：育苗，イチゴ，高設栽培，さちのか，促成栽培，低温短日処理，摘果